
俺の人生はとあるデスゲームでかわったっ！

絶英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の人生はとあるデスゲームでかわったっ！

【Nコード】

N2432BA

【作者名】

絶英

【あらすじ】

とても最悪な人生を送った木田徹は静岡に移り住み平凡な毎日を送っていた。そんな時、仮想体感型MORPG《Lost online》が開発された。俺は早速βTに応募し抽選で選ばれる。βテストが終わった後正式サービスが始まるが仮想空間に移動する機械《Granderu》は俺たちβテスター分合わせて10万個しか作られなかったらしい。不思議に思いながらも正式サービスという嬉しさに全身を震わせログインするがその直後から俺たちのデスゲームは始まっていた。ログアウトできない、そし

てゲーム内での死は現実の死と同様という何とも恐ろしい仕様であった。脱出するにはゲーム内の舞台となるブロード大陸を攻略しデスタウンと言う最後の街を攻略することであった。俺は攻略に向けて歩き出すのであった。そしてそこで待つ新たな仲間とともに戦い新の人生を見つけるのであった。

よくあるログアウト不可のデスゲームです。あまり慣れていないですがどうぞ見てください。誤字脱字おかしな点がありましたら報告ください。後感想待ってます。よろしく願います。

1 (前書き)

M M O R P G系はまだ書いたことがないです。
いろんな場所で小説書いてますが初挑戦ですっ
頑張ります
見てくださいつ

——俺の人生は……最悪な物だった。

俺の母さんと父さんはとても仲が悪かった。毎日喧嘩をし母さんを一方的に殴り蹴り……。そんな毎日を妹と一緒に見てきた。

俺が小学校3年で妹が小学校1年だった時——

ある日電話がかかってきた。父さんの友人からだった。

内容は父さんが麻薬密売人として警察に逮捕されたというものであった。その時、俺のガラスのようにうつすぺらい人生にヒビが入ったのだった。

俺たち家族は近所から軽蔑の視線を浴びせられた。

学校でも同じだ。俺の机は黒の油性ペンで塗りつぶされ、黒板には「死ね」や「消えろ」と書かれ、それに気づく先生も誰も止めようとはしなかった。

辛い毎日を過ごしていた。だが妹もその気持ちは一緒だと思っていると俺が守ってやりたいという気持ちにもなれた。

俺が中学校1年で妹が小学校5年の時——

父さんが帰ってきた。話を聞くと刑務所から脱獄してきた。外国の方に高飛びするから金を貸せというのだ。これには俺も妹も母さんも呆れた。それと同時に怒りが込み上げてきた。家族をこんなに不幸にし拳句の果てに金を貸せだと、謝る気持ち一つもない。

父さんは早く出せよ、と催促する。

いきなり母さんがキッチンに向かって走って行った。何をするのかと母さんの方を向くと母さんは包丁を手に持ち「出ていって!」と強い口調で言うのだ。

父さんは怒りに満ち溢れた表情で母さんの方に歩いていき包丁を奪おうとする。母さんはぶんぶん包丁を振り近づけないようにす

るがバツと飛び掛かられ押し倒されてしまう。

包丁を奪われそうになり必死に抵抗する母さんと包丁を奪おうとする父さん。その勢いにより周りの物がガンガンと床に落ちる。

このままだと母さんが殺されてしまう……。その後は俺らも……。勿論妹も……。

俺は父さんにとびつかろうと椅子から立ち上がろうとしたその時――。

グサッ!!

ぐああああ!! と叫び声を上げバタツと倒れる父さんを震えながら見る血だらけの母さん。

俺と妹は震えで身動き一つできなくなっていた。怖かった……。怖かった……。

終いには妹は泣きだしその場に崩れ落ちる。俺はどうすることもできずその場で立ち尽くしていた。そんな俺を見た母さんは走って俺の方に向かってき、血だらけの包丁を俺の手に持たせ返り血の付いた上着を脱ぎ手についた血を洗い流し妹の手を取り逃げ出していた。

ボタン!

玄関のドアが閉まる音がした。

これで俺は犯人にされたのだった。

周りは散らかった本、父さんの死体、その周りを囲むように広がる血だまり、母さんの上着。何の反応もできず手にする包丁をその場に落とし俺は泣き崩れた。

騒ぎに気付いた近所の方が通報したのか1時間後に警察がやってきた。初めはパトカー数台だったが次第に増えていった。

勿論その場にいた俺が犯人にされた。何の反論もすることなく俺はそれを受け止めた。妹と母さんが幸せに暮らせるならそれが何よりだったからだ。

俺は取り調べをされ嘘の事を言った。

その何日か後に俺は釈放された。事後捜査により母さんが犯人だということが分かったからだ。高飛びしようとしていた母さんは空港で身柄を拘束されこの事件は終わったのだった。

事件後俺は学校にも地域にも居られなくなった。毎日のように家に押し寄せてくる報道人。学校ではだれからも相手にされず苛めという段階を通り過ぎる程過度なことをされた。妹も同じだった。

だが我慢して俺が中3になるまでその地域に居た。辛かったが耐えた。

だがもう無理だった。

俺たちは別々に暮らすことにした。

俺は静岡の親戚の家、妹は東京の祖母ちゃんの家で暮らすことになった。

俺の親戚の家は超ド田舎と言える街だ。俺が暮らすには最適な所だ。

俺は野球好きで中学では一応野球部所属のピッチャーだったための丸坊主の頭から髪を伸ばしどう見ても根暗としか思われないようにした。結構顔が良かった(自称)ので髪もそれに合わせて伸ばした。

俺は今黄桜高校に通い普通の学校生活を送っていた。髪をのばしたことが効果があり誰も俺の事には気づいていない。髪型とか雰囲気とかのおかげであだ名が「ネクラ」になってしまったが中学校に比べれば何の支障もない。楽しい生活だった。

あのゲームをするまでは……。

1 (後書き)

次回1作

誤字脱字あれば報告よろ

※短すぎたああ

もつと長くするからねっ

2 (前書き)

今回は長くする予定(仮

黄桜高校に入学してから俺——きだとおる木田徹は毎日平穏な日々を送っていた。新しい友達とキャッチボールとかしたり（野球部でない）日進月歩していくインターネットとかやったりとても楽しい毎日だった。まあ女子からはネクラと呼ばれるのには変わりないがな。

因みに俺の親戚は裕福で個人用のPCも買ってもらった。新型のPC「ZEX？」と言うらしい。

ドネス

それは「ウインWINDO

NE SU」という会社が発売した物だ。そのPCはキーボードだけ

で画面がないのだ。キーボードの上部中央あたりから特殊な画像映し出されそれが画面の役割を担っている。マウスは無い。キーボードの右にタッチパネルがありそれを指で操作することでマウスの役割を担っている。インターネットも今の時代ではどこでも繋げる。それにコンセントも不要ということで学校にも持っていける。俺としては超嬉しいものであった。

俺の友達も同じものを持っており自習になり先生がいないときとかになったらいつもオンラインゲームとかチャットとかして遊んでいる。

とても楽しく最高の毎日だった。

——だが……

不安な気持ちもあった。

あの日がまた蘇ったらどうしようか……。学校に俺の事がばれたらどうしようか……。それで高校を中退になったらどうしようか……。そうしたら今の仲間は……。

毎日不安は頭の中をよぎった。

明るい顔をしていても怖く苦しくなきたくなるほどだった。



ある日俺は学校昼休みPCでニュースを見ていた。新型のPCが発売されたとかいうのもなく、野球の試合速報でも応援しているチームが負けてしまいうがっかりしていた。俺が飽きてPCを切ろう電源スイッチに手をかけたときだった。

「うほおおお！……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「！！！」

T T T T T T T T T T T ! ! ! ! !

「徹！！！！！！！！！！」

隣のクラスからP C仲間である――高田哲也たかたてつやが猛牛をも超える勢いで走ってきた。

「はあはあ……！ 徹……！ はあはあ……！ ニュースのはあはあ……！ ゲームニュース速報つてところはあはあ……！ 見てみる……！」

こいつ……俺の顔の前でくせえ息を吐きやがる……。これはニン
ニクのにおいだ……。っておいっ！ 俺の机の上にヨダレ垂らして
んじゃねえよ！ つかヨダレが俺のノートの上にかかったんだが……！
これは幻覚だよな……？

とつまあ……

「とりあえず落ち着けよ……」

「お、お、お……」

3分程休み落ち着いたようだ。その間にヨダレに気付いたのか手で拭いていた。逆効果でヨダレのシミが広がったけどな……でも俺はそんなもの見ていなかったことにした。

ついでに俺のクラスのPC仲間兼キャッチボール仲間でもある――

よしだしんいち
吉田真一が寄ってきた。その後からP C仲間が数人寄ってきた。

「で、どうしたんだ？」

俺は問いかけた。

「ゲームニュース速報ってところに大きく張り出されているやつあるだろ？」

と、高田は言ってきた。

俺はキーボードの電源をONにし画面表示をONにした。その後ゲームニュース速報と言うものを調べ大きく張り出されているやつを発見した。そこには『仮想体感型MMORPGの開発に成功!!』とあった。なんなのだろう……？

「仮想体感型MMORPGってのは仮想空間に移動する機械《G u r a n d e r u》を使って仮想空間に移動して自分自身の脳で操作できるってやつなんだ。視覚、聴覚、嗅覚、感覚とか触感とかが立体的に再現してあって現実の世界と殆ど変らないんだ。ゲーム名は《L o s t a l l o n l i n e》。だがゲーム内容とかは分からないけどな」

「まあわかった。今の日本の技術ならばいつか出るだろうとは思ってた。けど……俺が疑問なのはなんで哲也がそんなに詳しいのか……だ」

周囲のP C仲間も同じ事を聞きたかったらしく「なんでだっ!」と叫んでいる。まあ中には仮想体感型MMORPGの開発成功の喜びで失神したものや「ギャアアアアア!」と叫び狂っているやつら（吉田氏その他多数）もいるがそいつ等は無視しとこう。

「ああそれはな——」

と俺のP Cを強奪し隣の机に置きキーボードを打ち始めた。そしてカチッと一際大きいおとをたてた後俺の所に持ってきた。

「これが《L o s t a l l o n l i n e》の公式HPだ。で此処が仮想空間とかそこらへんの説明がある」

「なるほど……」

と俺はうなづいた。

「で、だな……！ 俺はこの《Lost all online》のβテストに応募しようと思うんだ。お前も応募しないか？」

抽選で1000名と公式HPに書かれていた。かなり興味がある。

「ああいいぞ……！ 俺も興味あるしな」

そう言った途端に周りの奴ら（暴れ狂っていた吉田氏その他多数と失神していたものも含む）も「俺も応募するぜっ！」とどこかの懸賞に燃えるオバサン連中のように声を張り上げてきた。

「じゃあ決まりだな！ βテストの抽選に選ばれたら一緒にやろうな！」

高田は言った。

「」「」「おお！」「」

俺らは声を合わせて言った。



——やっちゃった……。

βテストに抽選で当たってしまった……。

俺はあの後の自習の時間に応募を済ませた。

当選者発表の日を数日待って当日の朝。そんなこともすっかり忘れあくびをしながらメールを確認していると『《Lost all online》βテスト当選のお知らせ』という件名でメールが来ていた。

内容を要約するとこうだ。

木田様は《Lost all online》のβテストに当選されました。おめでとうございます。尚βテスト ーの皆

様のみには《Guranderu》などの機器が後日宅配として届きます。ですがそれらは全て無料　です。お間違いのないようよろしく願います。

※尚この《Guranderu》は正式サービスの際にも使用できますのでお使いください。

と……。

嬉しすぎて泣いちゃった。

今日学校行ったら自慢してやろう……！

2 (後書き)

一応次回1作(仮

誤字脱字など感想募集中っ

3 (前書き)

おお！

お気に入り登録4件！！

みなさんありがとうございますっ！

更新はあまり早くないけど皆見てください
よろしく願います。

今回いければ2作書きますよ。

＞学校で自慢するところ＜↓深夜1作

＞βテスト（始まり）＜↓朝1作

※あ、後……この小説をどんな所で広めていっ
てもらえるとうれしいです！

3

俺は陽気に朝食を貪り学校に走っていった。

出発時刻6時。到着までにかかる時間30分程。

少し早く出すぎただろうか・・・・・・？

俺の登校はバスで学校近くまで行き歩いて学校に行くというものであった。

勿論いつもの俺なら朝遅く家を出て、ぎりぎりのバスに乗り走って学校に行くというのであった。が・・・・・・陽気になりすぎて恐ろしい勢いで家を出てしまった。

起きるのは人一倍早い俺だがグダグダPCしていると遅くなるのが毎日であったが今日はメールを見た瞬間なぜか頭の中が自慢という文字でいっぱいであった。たぶん脳内メーカーで俺の名前を検索すると自慢の「慢」の字が埋め尽くしているだろう・・・・・・。

俺が停留所に着きバスに乗るとそこは無人であった。生徒の中には自習とかしているやつらが朝早く着たりするが流石にこの時間にはいなかった。

どんだけ早く着たんだ俺・・・・・・。

俺は席に座りながら苦笑した。

登下校の道には坂がありその坂が格段ときついのだ。下るのには角度が急すぎて危なすぎるため学校で全面的に禁止されており、上るのには角度が急すぎてとてもつらい。俺が遅刻して歩いて行くハメになったときは本当に辛かった。あの坂を乗り越え少し歩き学校に到着したときは、広大な砂漠でオアシスを発見したときのようなうれしさがこみ上げてきた。とにかく・・・・・・本当に辛いのだ・・・・・・！

その坂で俺は信じられない光景を目の当たりにした。

「真一……！！？」

俺のキャッチボール仲間でもありPC仲間でもあるその吉田真一が今、鬼の形相でチャリをこいでいた。真一は普段なら俺と同じくらしいの時間にバスで来るはずなのに……。なぜ真一が鬼の形相でチャリをこいでいるのかは全く分からなかった。鬼人の如く坂を駆け上がる真一の横を俺はバスで悠々と通過していった。

俺が学校についてから数分後に真一は到着した。

教室に入り俺の顔を見るなり真一は「死ね」と言ってきた。何なんだこいつ……。

「とりあえずさ……。何でお前がいるんだよ……。？」
真一が問いかけてきた。

「いや……。先にお前が言うべきだろ？ 何でこんな早く着たんだ？ しかもチャリで……。？」

「なっ！ 見てたのかっ！？」

「ああ見てた。坂を鬼の形相で駆け上がっていたな。めっちゃくちゃ笑えたぞ」

「なっ……。！ 死ねやちくしょお！」

「いや無理だから……。？」

と、まあこんな会話を続けて3分後。

「とりあえずさあ……。本題入ろうか……。？」

なぜ早く着たのかが知りたくて話を打ち切った。というか完璧に本題からずれていたので打ち切るのが普通。

「ああそうだ……。徹……。驚くなよ……。？」

驚かねえ。逆にお前が驚くハメになるだろうよ。

「えっとだな、グホオン！」

めっちゃくちゃじれったいなこいつ……。

「絶対驚くなよ……。？ だからなあ……。ゴッホ

「ん！」

あえず喋れ。

「だからなあ……グファン！」

いい加減うざくなってきた。

えつとだなあ
・
・
・
・
・
・
実はなあ
・
・
・
・
・
」

おっ！
 どうとう話してくれるか……！？

「実は……ゴホン！」

「さっさと喋れや！」

かなりうざかったの。で言っちゃった。

あぁ……すまんすまん。ちよつとじらしすぎた」

じらしすぎだろ！

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

何……だと……？　もう一度言ってくれ」

「だーかーら！βテストに当選しましたあ！！！」

何だとお！！　かなり驚きだ。あれだけ驚かないと思っていながら・・・というか俺のネタが・・・。しょうがないな。話すしかないな。

「実はな……俺も当選してたんだよ。βテスト」

「何だとお!？」

「ってことは俺達一緒に遊べんじゃん！ ラッキーじゃんか！」

眞一は満面の笑みを浮かべながらそう言った。

俺も氣を取り直し「ああ！」と言った。

その後一般生徒の登校時間になると続々と人が登校してきた。俺らが一番乗りってことに驚く奴らもいればガン無視で登校してくる奴もいる（女子）。

登校してくる奴の中に混じるPC仲間がどんどん集まってきて当

選したか報告しあった。

結果俺達だけが当選したことが分かった。

その後授業は嬉しさで頭がいっぱいになり全く入らず、自習でもPCをつけたまま何もせず隣の女子を見つめ微笑んでいたらしい。全く覚えていない。自習の時間であだ名が「ネクラ」から「ヘンタイ」へと進化した。

3 (後書き)

誤字脱字等ありましたら指摘よろしくお願いします。
感想 and 評価お待ちしております！

※自習は黄桜では毎日1時間あることになっています

1 (前書き)

新章「βテスト」です。

朝書くとかいいながら・・・
W

まあいいとして・・・

見ていってください！

とうとうこの日が来た。

この日というのは、今日がβテスト開始なのだ！ 昨日災難なことがあったが今日で気力回復だ！

昨日機器が届き色々試着していたがかなりおもしろい。頭にフィットするのだ。素晴らしい感じに。

フィット感にはまってしまい装着しながら笑っていると夕飯ができ呼びに来た祖母ちゃんにヘンタイだと間違われた。いきなりドアを開けて「1人遊びは見つからない所でしなきゃ駄目よ！」といわれた。誤解だ。盛大に誤解しているよ。その後ご飯を食っているときの祖母ちゃん祖父ちゃん変な目で見られた挙句、祖母ちゃん祖父ちゃんの娘の椎名理沙（中三）に「1人遊び……！ 私がお兄ちゃんの初めてになりたかったのに……。1人遊び駄目、絶対！」といわれた。俺はまだ未経験だが……。って言う話ではない。皆誤解してるんだ。誤解なんだよお！

とつまあ昨日は恐ろしい誤解をされたわけなんだが。もうそんなの関係ねえ！

俺はβテストが始まる時間の7・00まで機器の使い方の確認や試着を繰り返していた。

ピピン

PCから軽快な効果音が聞こえた。この音はチャットが更新された音だ。

「何だ？」

俺はPCの画面を見てみた。チャットは真一からだった。

『どうせお前も7・00ちょうどにINするんだろ？ じゃあ一緒にしようぜ！』

俺はすぐに返事を返した。

『いいぞ。後、色々調べてるとβテストでのキャラは正式サービスでも継承されるらしいから武器とか考えて選んだほうがいいぞ。因みに俺はまだ決めてない!』

ピピン

返事が返ってきた。

『そうなのか!? そこまでは知らなかったぜ! まあ俺は魔術師にするつもりだし。確か選べる武器は杖と魔道書だろ。杖は近接攻撃もできるが魔道書に比べれば魔力は落ちるらしい。詠唱速度も落ちるらしい。魔道書は近接攻撃は一切できねえけど魔力、詠唱速度は杖より上らしい。魔術師選ぶ奴は魔道書が多いだろうが俺は敢えて杖にするぜ!』

あのMMORPGは大まかに5つの職業がある。>戦士<>魔術師<>司祭<>狩人<>盗賊<その中でもまた職業が小分けしているらしい。有名な掲示板「&CH」というものでは>戦士<でLVが上がると槍師になれるとか>盗賊<の中にはランパーと呼ばれる職業があるとか>戦士<では二刀流が使える職があるとかいろいろ噂がある。だがそれが本当なのかは全く分かっていない。なぜなら公式HPで5つの職の特徴とどんな武器が使えるかぐらいしか乗っていないからだ。

真一が選んだのは>魔術師<だ。&CHでも噂があまり流れていない謎の職という奴だ。公式では魔法を操る職と書いてあった。その名のとおりってわけだ。

俺はカチカチとキーボードを押し返事を返す。

『魔術師か。決めるの早すぎじゃないか? もしくはずれ職だったかどうかするんだよ。つか杖とか確実にはずれ武器だろw』

ピコン

すごい速さで返事が返ってきた。

『そんなのやってみないと分からないだろ! とにかくもう時間だ。次は仮想空間内で会おうぜ! お前がどんなハズレ職を引いてくる

か楽しみだ！　じゃあな。ノシ』

俺は戦士にするつもりだ。絶対、安定職だろう。

『ああ、楽しみにしといてくれ。ノシ』

返事は返ってこなかった。

俺は時計を見た。6時30分を指している。

「残り30分か・・・。。夕飯食ってくるか」

俺はそう言い部屋を出た。

「うおお！！！」

俺は恐ろしい勢いで走っていた。

残り2分！

さっき俺は飯を食いに部屋を出たが家には祖母ちゃん祖父ちゃんが
おらず夕飯もなかった。机の上には一枚の置手紙が。

ちょっと二人で外食行ってくる！

ついでに今日はホテルに泊まるから4649！！

何なんだあいつら・・・。。ホテルで何するきなんだよ！
というか無責任すぎるだろ！

「俺と理沙二人っきりじゃないかよ！」

つい大声で言ってしまった。

俺の後ろには理沙がいた。

「二人っきり・・・。。お兄ちゃんとウフフ」

顔を赤らめるな！　　というか何するきなんだ！

「理沙、お前どうするんだ？　夕飯」

「お兄ちゃん買ってきて〜！」

と、俺に抱きついてきた。

「おい、やめろよ・・・。。！」

おいおいおいおい！！　胸が当たってるんだが・・・。。。。し

かもかなり大きい胸なんだが……。

理沙はそれに気づいたようではっと離れる。

「お兄ちゃんの……えっち……」

再度顔を赤らめる。

それって俺のせいなの!?

「まあいいから……。今からコンビニ行ってくるからさ。

理沙は何がほしい?」

「えっとねえ。私はお兄ちゃんがほしい」

「死ね」

即答してしまった……。。

「うえーん。お兄ちゃん酷いよお」

「すまんすまん。嘘だ。生きてくれ。頼むから生きてくれ……

・で、何がいいんだ?」

「えっとねえ。とりあえずサラダとおフライドチキンとおおにぎり
でいいよお」

「分かった。後、コレ俺の自腹だからおにぎりは帰ってから作って
やるよ」

祖父ちゃん祖母ちゃんは夕飯代さえ置いていってくれなかった。

何て酷いんだ……。

一応俺は料理ができるからおにぎりぐらい朝飯前だ。

「やった」

「まあいい。俺急いでるからさ。すぐ行って帰ってくるから待つて
ろ」

「うん!」

俺がコンビニに行って帰っておにぎり作って夕飯食べて理沙にTV
でしてたMORPGをするから12時まで一人で何かしててくれ、
と言い「1人遊びだねえ分かったあ!」と顔を赤らめながら返
答しそれで気づいたら残り2分。

俺は階段を恐るべき勢いで駆け上がった。そして部屋に入り機器

を頭に装着してからベッドに横たわる。

（確か・・・・・・・・。横のボタンを押すと仮想空間に飛んでいけるらしいな・・・・・・・・）

時計を見ると残り20秒で7時という所だった。

（危なかったな・・・・・・・・。まあ間に合ってよかった）
残り10秒だ。

カチカチ

部屋中に時計の針の音が響き渡る。

そして・・・・・・・・。

カチ！

時計が7時になったのを確認すると同時にボタンを押した。

1 (後書き)

次回1作

誤字脱字

感想

募集中！

お気に入り登録もよろっ！

2 (前書き)

とうとうゲーム内へ潜入でするぞっ！

今回はβテスト。

正式バージョンになってからデスゲームになります。
βテストではデスゲームじゃないっす。

ハッ

ぱっと目を開けた。

ここは……どこだろう……。

とてつもなく広く白い世界だ。

俺が周りを見渡していると画面が現れた。

「名前入力」

キャラネームを入力しろということであろう。俺は数分悩んだ結果「トール」にすることにした。俺の名前の「徹」をカタカナで書いただけだが我ながらなかなか良い名前だろうと思った。

ん？ 入力の仕方が分からない……。

名前は決めたものの入力がどうやってやるのが全く分からなかった。

確か……公式には……キーボードと心の中で思いながら親指と人差し指、そして中指で目の前をスライドさせると出てくると書いてあったな……。公式読んでない奴には辛い仕様だな。

俺は慣れない手つきで目の前をスライドさせた。

すると画面状のキーボードが出てきた。これで離れたやつとチャットできたりするらしい。普通に喋れたりするので近くにいる奴とチャットするときにはこれは必要ないとも書いてあったな。

俺は名前を打ち込み、画面上の「OK」を指で押した。

トールさんですね。

画面が現れる。そこには外見設定と書いてあった。外見を設定しろということか。俺は画面の右端に「現実と似たキャラにする」と

いうボタンがあったのでそれを押した。

俺の周囲を光が飛び交う。くるくると回っていると、俺の体がキラッと光った。何が起きたのかと思い、外見設定に映される自分の姿を見ると現実の俺とかなり似たキャラが出来上がっていた。流石にそのままはまずいと思った俺は髪の色と目の色を変えOKを押した。

因みに職業は何ですか？

また画面が現れ＞戦士＜＞魔術師＜＞司祭＜＞盗賊＜＞狩人＜と書いてある。

俺は＞戦士＜を選択し「OK」ボタンを押した。すると武器選択と出た。

＞片手剣と盾＜

＞両手剣＜

＞斧＜

＞槍＜

ここまで下調べしてなかった俺は少し悩んだ。安定職とは言っても勿論ハズレ武器もあるはずだ。初めは武器が変えられないのでここでしっかり決めないとかなり苦労するということだ。

悩んだ末＞片手剣と盾＜を選択しOKを押した。

トールさんは戦士なんですね。

会話が現れると同時に声も聞こえる。優しい女の方の声……。この声……。タイプだ……。

戦士の特徴をまとめた物があります。どうぞ。

画面が現れ、戦士の特徴と初期スキルが書かれていた。初期スキルはたくさんあり10個程ある。スキルの覚え方、使い方も書いてありなかなか役に立つ。なるほど、と納得しながらOKを押した。

もういいですか？ これは、いつでも見ることができますので困った時には見てください。

と、ウィンドウの出し方の説明が出た。フムフム……。ウィンドウと心で唱えながら人差し指でタッチか。キーボードは難しいがこれは簡単な仕様だ。

では、トールさんの冒険の始まりです。

と声が聞こえた途端に周りが一気に明るくなった。

数秒後、俺は謎の街に飛ばされていた。

周りには俺と似た格好の奴らがいる。ここが始まりの街なのだろうか……？

そう思っていると画面が現れた。画面にはこう書いてある。

ユニルナス暦316年4月7日ヨシノツキサナノヒにリステイムニア大陸にサンミラ

帝国が建国された。帝都をこの街ユンノーシとし大繁栄していた。繁栄を見た帝国はとうとう大陸制覇に動いた。め兵を出征した。兵は各地に散らばるモンスターを倒し領土を広げ出征は大成功に見えた。

ところが ユニルナス暦333年7月23日ナナノツキノジュウノサンノヒ帝国軍がモンスター

ーに大敗し今まで攻略した都市を全て捨て逃げ帰った。それを追撃したモンスターは帝国領に侵入 し各地の都市を落としながら帝

都に迫った。

ユニルナス暦335年6月6日ロクノツギクノヒ帝都攻防戦が始まった。20万を超えるモン　スターに対し帝国軍は残兵や魔術師3万近い兵を招集した。戦いは1ヶ月にも及んだが帝都は陥落。サンミラ帝国は滅びたのだった。

ユニルナス暦512年に他大陸から兵が集められかつて帝都だったユニノーシに侵攻した。そして陥落　させることに成功した。彼らはユニノーシを国都に選びサンミラ国を建国。多くの冒険者を集めサン　ミラ帝国再建するべく動くのであった。

そなたは冒険者だな。名前は……トールか。トール殿もサンミラ国王ヘルスィア・サンドロス様に　招集されたのであろう。

トール殿、知つての通りだが冒険者を集めたのにはわけがある。

サンミラ帝国の再建だ。そしてリス　ティムニア大陸制覇だ。

―成功条件―

- ・敵の本拠デスタウンの攻略。
- ・サンミラ帝国の再建。
- ・リスティムニア大陸制覇。

―失敗条件―

- ・冒険者の全滅。
- ・ユニノーシの陥落。
- ・サンミラ国の滅亡。

長すぎてとても読む気にはなれなかった。ところどころ読んでみたが全く分からない。成功条件を全て達成させればいいわけだ。だが気になったことがある。失敗条件の中にある「冒険者の全滅」で

ある。俺ら冒険者がモンスターにやられても生き返るはずである。そうでなければ成り立っていかないからだ。だが、全滅という条件がある……。俺はこの言葉に違和感を感じた……。

成功条件と失敗条件を一通り確認したので俺はOKを押した。画面が切り替わった。内容によると現実の時間と仮想空間内の時間は同じで現実世界で7時なら仮想空間内でも7時になる、ということだった。

俺はそれを確認し画面を閉じると、すぐさまウィンドウを開いた。武器がかなり気になっていたのだ。俺は「装備」を押し現在の武器と防具を確認してみた。

武器…「錆びた剣と鍋の蓋」
防具…「ビギナーセット」

完璧初心者装備だった。まあしょうがないだろう、NPCショップで買えばいいだろうと思った。俺はウィンドウから「持ち物」を選択し持ち物を見てみた。すると、入っているのは初心者指南書と謎の薬×5だけだ。謎の薬……？　なんだそれ。と思い説明を見てみると……。

謎の薬品。誰が作ったのかもわからない、本当に謎の薬。飲むとHP・MP50ずつ回復する。

回復薬ではあるがあまり飲みたくない。誰でもそうだろう。

俺はこんな薬捨ててさっさとまともな回復薬を買おうと所持金を見てみた。

所持金…10N^{ニール}

こんな金額では鍋蓋も買えなかっただろう。というか門前払いさ

れるだろう。

ニールはこの世界のお金の単位だ。金はモンスターからドロップしたり、得た素材を売ったりして儲けることができる。素材は武器製作にも使えるのでかなり有効である。

とにかく、ここでの生活とモンスターとの戦闘に慣れないといけないから真一をPTを組もうと思いい真一を探す。そういえば真一の名前なんだろう……。

俺は途方に暮れていた。

2 (後書き)

次回1作。

つか授業中も小説のことしか考えられないw

ノートには歴史がびっしり……かと思いきや

職業構成やバランス、内容、武器、スキルの候補がびっしりっ！w

※もうすぐ終わってない課題が全部終わるので1日2作書くかもしれません。

誤字脱字、おかしな点とかありましたら報告お願いします。
感想お待ちしております。

お気に入り登録もよろっ

※一部訂正と情報

・ゲーム機器の生産台数を1万から10万に変更しました。

情報

1. 職業構成と武器が決定しました。

2. スキル考案中

3 (前書き)

βテスト中です。

前回真一の名前を聞いてないという事実が発覚し途方に暮れる徹でした。

今回どうなるのでしょうか。

お楽しみに！

3

30分程だろうか……。

俺はどうすることもできずに広場の噴水の近くにあるベンチに座り込んでいた。

どうすりゃいいんだ……。

真一が来ないんだが……。

というか名前が分らないんだが……。

ハア……俺が溜息をついたときそいつは不意に現れた。

「溜息なんてつくとき幸せが逃げていくぜ！」

いきなり現れてしかも初対面でそれはないだろう。俺はぱっと顔をあげそいつの顔を見た。それで気づいた。頭の上にキャラネームが表示されているのだ。

キャラネーム「SHIN」と書いてある。SHINと言えば真一は殆どのMMORPGにその名前を使っていたな。ん……？
ってことは……？

「お前……真一か？」

「ああそうだ」

やっぱりそうだったか。

「今までどこいたんだよ？」

「ああん？　今まで狩りしてたぜ。ソロで」

「一緒に狩ろうって言ったじゃんか！」

「お前が遅かったからどうせ飯でも食ってんだろうと思って先に狩ってたんだよ！」

なんて野郎だ……。

「もういいわ……。で、ソロで狩れたのか？」

このゲームは敵が強いと聞いている。

「結構狩れるぜ。E1『バインディングフォレスト』って所なんだが、初めは敵が弱くてな。やり方が掴めて来ればサクサク狩れるぜ

！」

バインディングフォレスト。エリア1で適正LV1、敵もフォレスト入り口近くの敵は殆どがLV1だ。体力は多いものの防御と攻撃が弱い。ドングリファイターードングリに足と手が付いたような奴だ。ファイターと名がついているのに攻撃が弱いってどういうことだよ。

「さっさと狩りに行こうぜ！ 金は5Nドロップするけどあまり足しにはならないぜ！」

「そうか……。じゃあ行こうか」

俺はソロ狩りをした真一を恨みながらも真一とPTを組みバインディングフォレストにつながる門へと向かった。

タツタツタ！ バツバツ！

俺は軽快なステップを踏みながら敵の攻撃をかわし敵の背後に回り攻撃をした。

真一は遠くの方からフレイムとい遠距離魔法を使って援護していた。

俺は今、バインディングフォレストの入り口付近に湧いているドングリファイターと戦っていた。俺は真一と戦闘指南を頼りにしながら戦いに慣れ1時間狩っていたらこの様だ。かなり慣れてソロでもいけるんじゃないか、てきな感じになってしまった。

1時間狩っていればLVも上がる。俺はLV3になり真一はLV4だ。スキルも多少覚え完全に使いこなせるというわけではないがかなりいい感じだ。

俺と真一はそこら中に湧くドングリファイターを狩り続けた。勿論他のプレイヤーも来て同じ場所で戦うのだが、もともとバインディングフォレスト入り口がかなり広いため他のプレイヤーが来て狩ったところで変わらないのだ。

1体、また1体、また1体と俺たちはどんどんドングリファイターを倒していく。ここまで慣れるのにどれだけ謎の薬を消費したこ

とか……。おかげで後6個しかない……。

MPもHPも自動回復するためその場にとどまっておけば回復するのだが何せ敵の数が多くどんどん寄ってくるのでそんなこととしてられないのだ。

その時真一が声をあげた。

「やべMPがつ！」

MPが切れたらしい。無抵抗となった真一にドングリファイター数体が襲いかかる。

「うわああああ！」

ドングリファイターにフルボッコにされた真一はHPが消滅し死んでしまった。

真一が死んだ今。ドングリファイターのターゲットは俺に来るわけ……。1体を相手にして戦っていた俺も数体にフルボッコにされ死んでしまった。

「ここは……街……？」

そこには噴水があった。真一を待ったベンチもある。

俺の隣には真一もいた。

そう、βテストでは死亡した場合始まりの街に戻されるのだ。

「トール急ごうぜ！ 残り1時間しかねえぞ！」

いきなり真一が言った。

「何のことだ？」

「はあ知らねえのかよ！？」

「だから何のこと……」

俺は思い出したのだった。βテストは3日行い7…00に始まりから10…00に終わるということ。

「そうだ……いそがねえと……」

「やっと思ひ出したか！ さっさと狩に行こうぜ！」

少しでも狩りたい。狩ってLVを上げたい！

「ああ！」

終了10分前になりました。
街の外にいる方はそこで強制ログインとなり死亡扱いとなります。
急ぎお戻りください。

そう放送が流れた。

「もう時間だな……」

「そうだな……」

俺と真一はあの後入口付近で永遠と狩をし続け俺はLV5真一はLV6となったのだ。

俺は敵数体とでもやりあえるようになり真一も複数体に攻撃を与えられる魔法を会得しかなり狩が楽になったところだった。

「まずは街に戻るか」

「ああ」

俺と真一は急いで街に戻るのであった。

街に着いた俺たちは明日のことについて話した。

「明日はどうする？」

俺は真一に問いかけた。

「明日はなあ……用事があつて無理そうなんだ……」

真一は残念そうに答えた。

「そうか……。じゃあ俺は一人でやつとくとするよ。次は学校で会おうな！ βテストでは3日目に会おうぜ！」

俺はそういった。何の用事があるのかは知らないがかなり悔しそうだった。それだけこれが楽しみだったんだろう。

「ああ……」

「じゃあ……ログアウトするか！」

「そうだな！　じゃあなツール！」

「ああ！」

そう言って俺はウィンドウのログアウトを押した。

3 (後書き)

真一↓SHIN

です。彼はツールが途方に暮れている30分ずっと狩りをしていた
そうです。

徹夜続きで冬の課題が終わりそうなので小説1日2話でいけるかも
しれませんよっ！

皆さん見てくださいね^^

誤字脱字、おかしい点があれば報告してください。

感想、評価、お気に入り登録もよろしくお願いします。

では次回をお楽しみに♪

4 (前書き)

1日目終了後の家でのお話。
学校での事

βテスト2日目です。
今回は長いかも。

※過激な表現が含まれています。↑まだ過激と言えるかわかりませんが……

(十分注意してウハウハと興奮しながらお読みください)

パツと目を開けるとそこは俺の部屋の俺のベッドの上だった。まあ当然のことだ。

だが一つおかしいことがある。

「なんで理沙が俺の上に乗っているんだ……？」

「理沙ねえ一人遊びしてもつまないから二人遊びしようと思ってお兄ちゃんの部屋に行ったの。そしたらお兄ちゃんが寝転んで何かしてたから理沙が弄っちゃおうかとお兄ちゃんの体の上に乗ったときにお兄ちゃんが起きたの。分かった？」

二人遊びって……話の内容から推測するにとってもいやらしいことになってしまふのだが……。気のせいだろうか……。俺の推測が間違ってるんだよね……？

「ああわかった……。十分分かったから……。まずは俺の上から降りような？」

「嫌だ……！」

理沙が即答してくる。

「理沙……お兄ちゃんの弄るから……。そんな面白いことない！」
そう言って理沙の手が俺のズボンのチャックにかかる。

「ちょ、やめろっ！」

俺は必死になって抵抗するがその怪力でびくともしない。

ピリピリ

俺のチャックが下ろされ俺のシンプルなパンツがあらわになる。

「ちょ、まじやめろっ！」

俺は今まで以上の力で抵抗するが全く効果がないのかびくともしない……。

「理沙……とうとう一線を越えるんだね……！」

ジュルと口から音を立てると、次は俺のベルトに手をかけた。

「ググ……！ くそっ！」

俺は最後の力を振り絞り抵抗するがやはり動かない……。理沙の力の源はいったいなんなんだ！

「もう駄目なんだよ。理沙はお兄ちゃんと一緒になるの。今日ここで」

そう言いさらにベルトをほどいていく。

「嘘だよな……？ この手をどけてくれよ……。お兄ちゃん苦しんでいるけど……」

「嘘じゃないよ？ 苦しいって言うてるけどすぐ楽になるからね。」

楽しくてやみつきになってとてもいい感じになるからね」

そう言っ俺のベルトを解きズボンを降ろそうとする。

どうすりゃいいんだ……！ その時俺は思い出した。理沙の弱点を……。

「なあ理沙……。先に気持ちよくなりたいたろ……？」

そう言い俺は手を理沙の足の裏に持っていきコチコチヨコチヨする。

「ああん……うはあん……ああ……お兄ちゃん……やめ……ああ……て……でも……ああん……気持ちいい……」

そうかなりエロい声で言っ理沙は倒れてしまった。俺も興奮してしまった。

少しやりすぎたか……。

理沙の弱点それは足の裏だ。足の裏をくすぐれば一瞬で落ちるのだ。

「はあ……今日はかなり危なかったな……危うく失う所だった……」

俺は理沙を抱きかかえ理沙の部屋に向かった。そして理沙をベッドに寝かせた後俺は風呂に入りそのまま調べものをした。

今日俺は遅刻した。昨日の夜情報集めのため深夜まで調べていたらそのまま寝てしまい、さらに起こしに来た理沙に飛びついたらしい。理沙は「お兄ちゃん……溜まったら言ってね……？ 私使っいいからね？」と顔を赤らめ言っ学校に行った。誤解なんだ……！俺はどうせ遅れるんだしと1時間目と2時間目をすっ飛ばして行

ったら水の入ったバケツを持たされた。いつの時代だ……。

俺が水を持たされること1時間……。ようやく先生に許してもらうことができバケツを降ろした。そうして教室に入り室内を見渡し
てみる。

真一は……いないのか……。

「なあ、真一なんで休んだんだ？」

俺は近くにいた友達に聞いてみる。

「しらねえなあ……。家の都合としか言っていなかったし……」

「そうかあ……」

俺は昨日のβテストでの最後の時の元気のなさと言い今日休んでいることと言いい何か気にかかるが何かが分からず俺はそのまま普通の学校生活を送った。

βテスト2日目。

俺は昨日と同じように夕飯を食べに7時にログインした。

パツと目を開けるとそこはユンノシの噴水広場だった。

今日は真一がいないのか……。

そう思うと孤独感があふれだしてきてとても不快な気持ちになってしまう。虚しくて、寂しくて……そんな思いはもうしたくなかったのに……。

だが負けていられなかった。俺はそんな思いを振り切る。

「とりあえず動くか……」

そう独り言を言った時声を掛けられた。

「あのお……すいません……。昨日バインディングフォレスト入り口で狩っていた方ですよね？」

優しい声で顔は俺のタイプのポニーテールで黒髪で……。ようするに可愛い……！

「お……おうそう……だが……」

やべえ……緊張して言葉が……。

「やはりそうでしたかあ！　あのお私と付き合ってくれませんか？」
……

「え……？　付き合う……？」

彼女は「あ……わあ……！」と顔を真っ赤に染め顔を隠した。顔を隠したまま彼女はこういった。

「えと……えと……PT組んでもらえませんか……ってことで……
関係を持つとか……そういうのじゃあ……あ……うあ……違うんです……だって……私……高校生ですもん……早いですよ……うあ……
ああん……違うんです……」

かなり詰まりながら彼女は言っている。というかこの子高校生だったのか……！

「俺も高校生だけど……。まあいいや。PT組んでもいいよ」
彼女はそれでも「あ……うあ……」と言って顔を赤らめている。

「はあ……しょうがないなあ……」

と俺はPTを作り彼女に勧誘を送った。

「あ、ありがとうございます……。私は^{きりの}キリノって言います。あなたは？」

彼女が通常状態に戻って言ってきた。

「俺はツールだ。一応パーティーリーダー変えとくからな」
そう言って俺はリーダー変更をした。

「突然なんですが、あなたって高校生なんですか……？」
キリノが言ってきた。

「そうだが……なんだ……？」

「そうなんです！　私と同じ年頃の方がいて良かったです！」
さっきとは比べ物にならないぐらいの笑顔で言ってきた。正直俺も女子でβテストに応募した奴がいるとは思っていなかった。正直びっくりだ。

「俺もびっくりだ……。まあそれは置いておいてさ、どこ行くんだ？」

俺とキリノがPTを組んだのはこういう話をするためじゃない。

狩をするためだ。狩場がわからなくては意味がないのだ。

「ああそうでした。バインディングフォレストは今中枢部の廃村まで攻略しているそうです。廃村がかなり良い狩場と言うことを聞いています。私はその廃村に行って狩を試みたいのですが……ダメでしょうか？」

バインディングフォレストが最初のエリアで簡単とはいっても中枢部だ。それだけ強い奴がいるだろう。6人PTならともかく2人PTだ。流石に無理があるだろう……。

「えっとな……？ 回復なしでしかも2人PTで中枢部は流石に無理があるんじゃないか？ キリノのは知らないけど俺のLVは5だ。中枢部にLV5で突っ込むなんて流石に無理があるだろ。別ゲーでは初めのダンジョン中枢部はLV10のMOBがいたりもするんだ。無理だろ？」

「えっと……LV5なんですか？」

「そうだ」

「すごいですよっ！！」

キリノは感激の声を上げた。攻略PTならLV7とかもいるだろうし何がすごいんだ？

「&CHの情報だと攻略PTの最高LVが4らしいですよ。途中で死にまくってLV上げどころじゃないそうです」

「！！！！！！」

俺は喜びであふれかえっていた。ドングリファイターの方が効率良かったなんて……感激だ……。というか攻略PTのLVを俺のLVの方が上とはかなり嬉しい。

「後、私の職業は司祭でヒールが使えますよ。&CHによれば廃村の敵は数が多いのと攻撃が高いだけでHPもかなり低くレベリングには最適と書いてありました」

「お前……司祭だったのか……」

「そうですよっ！！」

と、あるかないかなり微妙な胸を前に付きだし「エヘンッ！」

と言っている。

「じゃあ話は別だな。俺、バインディングフォレストに入ってみたかったんだよな。とりあえずよろしくな！」

「あ……うん！　よろしく！」

俺達は目的地の廃村に向かうのだった。

4 (後書き)

誤字脱字、感想、お気に入り登録
よろしく願います。

今回3111文字でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2432ba/>

俺の人生はとあるデスゲームでかわったっ！

2012年1月15日01時48分発行